高橋是清の燃ゆる思い

前特許庁長官　高島　章

今年は，わが国特許制度が生まれて110年目に当たる．明治18年4月18日，専売特許条例が公布され，日本にも初めて近代的な工業所有権制度が確立した．アメリカに遅れること100年，イギリスに200年，の出発であった．

さる4月には，天皇，皇后両陛下の御臨席のもと，三権の長の出席をえて，110周年記念式典が盛大に挙行されたところである．

特許局初代局長に就任したのは，若き日の高橋是清であった．この記念すべき年に当たり，私は，特許庁資料館に保存されている高橋是清遺稿集をあらためて読みなおしてみた．

明治14年から18年頃，特許法制定のため，高橋書記官が情熱をかたむけて各条文の検討をしていたことを示す彼の直筆による審議録を見るにつけ，彼の熱き思いがひしひしと伝わってくる．

2・26事件の凶弾にたおれた高橋蔵相は，その数年前に自宅に大切に置いていた特許関係の資料を整理したようであるが，自らの死を予想していたかのような作業であった．おかげで，私たちは今，彼の時代の貴重な財産を共有することができるのである．

軍部の専横が激しく，戦争へと国全体が駆り立てられようとしていた世相の中で，彼は，わが国近代化のための基盤づくりに熱中していた昔をどのような気持でふりかえりつつ往時の手記等を読みかえしていたのであろうか．

この欄に，かつての私の上司であった故天谷直弘氏の玉稿が掲載されたことがある．彼は，その中で維新の志士平野国臣の歌「わが胸の燃ゆる思いにくらぶれば煙は薄しさくらしま山」を引用しつつ，ペリー来航以来の日本人の「胸の思い」は欧米に対する「おそれ，あこがれ，劣等感，キャッチ・アップ・情熱等が混合している可燃性ガスのようなもの」と論じている．

遺稿集の中の是清直筆の行間にも感じられる高橋の燃ゆる思いは，天谷氏がまさに的確に言い表わしていると思えてならない．

高橋が特許法案の作成に没頭していた頃，時代はめまぐるしく動いていく．国会開設の詔，日銀開業，鹿鳴館開館，内閣制度開始，そして特許制度創設，帝国大学令公布，帝国憲法発布と続く．可燃性ガスは燃え続け，そのエネルギーがいたるところで新しい制度を生み出していったのである．

発明奨励，技術開発こそが日本の発展の礎だという強い認識が，当時の関係者にそのための基盤的な制度誕生への情熱となったのである．技術レベルの低かった明治のわが国産業界は，特許出願してもパスすることは少なく，欧米の特許成立の方が目についた．新特許制度は，むしろ欧米のためのものであり，先進諸国の技術に独占を許すだけだとする批判が一般に見られたことも事実であった．

しかし，欧米からの技術移転を円滑にし，それ

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

をベースに国産技術を開花させていったその後のわが国技術発展の歴史を見れば，その発展基盤としての特許制度が高橋たちのねらいどおりに有効に機能してきたことは明らかである．

第二次大戦後，日本のメーカーが，たとえばナイロンやトランジスタ，IC等の基幹的技術を過酷な条件付きとはいえアメリカから導入できたのは，いずれも国内で特許制度が完備され，それら基本特許が的確に日本で成立していたからである．

それら革新的技術を核にして技術改良に努め，次々と関連技術の開発に成功し，多くの優秀な製品を全世界に送り出してきた日本産業のサクセス・ストーリーは今さら説明の要もあるまい．

特許制度はむしろ海外を利するものだとの風潮のあったとき，高橋は，当時では驚くほど大きな特許局庁舎の建設を提案した．時の農商務大臣井上馨が，部下であった高橋局長の巨大な庁舎案に首をかしげたとき，高橋は，このようなビルも20年でせまくなるようでなければ日本の発展はおぼつかないと反論している．

日本のいたるところで新しい技術の芽が生まれ，それが的確に権利化されるために特許出願も増加して特許関係部局も忙しくなり，そして技術革新の大きなうねりがわが国をおおうとき，日本の経済，産業の発展を望みうるのだということを彼は確信していたのである．

遠くを見ることができるという為政者の必須条件を彼は確実に自分のものとしていたと思われる．軍部の予算拡大に抵抗し，軍人教育の特異性を非難した高橋の姿勢は，かつて井上馨に反駁した若き頃と同じく，日本のとるべき進路についての自信に裏づけられていたのであろう．

最近，韓国，インドネシア，中国で特許制度の整備，充実につき各国政府関係者と協議をしてきた．各国はそれぞれ経済の発展段階，あるいは国情にも大きな差はあるものの，いずれも経済成長に不可欠なハード，ソフト両面にわたるインフラ整備に力を注いでいる．

特許制度もそのソフト・インフラの最も重要な1つとして関係者の熱意は一段と強いものがある．自国の基盤整備にかける政府関係者の情熱を感ずるにつけても，高橋の時代のことが思いおこされてならない．

北京やジャカルタ等で，日本の体験，それも高橋是清らわが国の先人たちの努力やその結実について話しをするとき，アジアの青年たちは実に熱心に耳をかたむけてくれた．

経済がグローバル化し産業活動が国境をこえて拡大しつつある現実を目の当りにして，アジアの若き人たちは，経済基盤の充実が地味で迂遠のようでも結局は確実に甘い果実を生み出すことになることを確信しつつある．

特許庁も今やアジア諸国のため色々な協力を進めてきている．研修生の受入れ，専門家の派遣，資機材の供与等幅広いものである．特許庁の若い審査官がタイ等の政府の中に入って法制度の整備に努力してもいる．

明治の初期，わが国も欧米からの技術導入に躍起となっていたのだが，通産省，農商務省の前身になる工部省は，その全予算のうち実に14％もの予算を外国人技術者の給与として支払っていたという記録がある．高橋も夢中になって欧米の制度の勉強をしていたのだ．

あの時代の可燃性ガスに似たものは，明らかに今，アジアの各地で新しいエネルギーを発散しつつ燃えている．

私の執務室にも高橋是清の胸像がおかれている．彼が現在生きていたら，何を思い，何を語り，何を実行するだろうか．私は毎日この像にむかいながら自問自答を繰り返している．

極東の一小国にすぎなかった頃，日本国内だけを対象とした新制度確立に邁進した高橋青年が，彼から数えて66代目に当たる私のポストにいたら，少なくとも特許制度を国内だけのものでなく，アジア大であるいは全世界の規模でどう構築していくかに真剣になるのではないか．

自らに問うては自ら答えたりしている．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．